

NPO法人

全日本語りネットワーク

ニュース

2026. 4. 22 発行

〒185-0021 東京都国分寺市南町 2-18-3 国分寺マンションB-03A

(Fax) 0237-67-7001 (振替) 00130 - 2 - 114808

(E-mail) welcome@japankatarinet.jp

(HP) <http://japankatarinet.jp/>

魂を揺さぶる語りを求めて

藤澤陽子 (岩手県盛岡市)

魂をゆさゆさ揺さぶるのが語りー。

語りの講座でそう教わった。それは私にとって語りの目的であり、目標であった。

読んでわかるものを、なぜわざわざ聞くのか、そう言った人がいる。私は、文字では伝えきれない、土地の雰囲気、場の息遣いなど様々なものが立ち上がり、心にまっすぐ伝わるからではないかと思う。そのうえ、「美しい女がいた」と言えば、絵や芝居など現実にビジュアルで見ると、想像のほうが際限なく美しい。語りの世界は視覚がない分、無限を表現できる。

今年も日本中の語り手が集まる『語りの祭り』がやってくる。第10回新庄大会で語りの師と仰ぐ古屋和子さんと出会い、東日本大震災を経て、突き動かされるように夜行バスで東京へ通い、翌年、語りの会風楽堂を旗揚げ、盛岡で被災地の読書支援に寄付するチャリティ公演を始め、今年で24回になる。毎回ご協力下さる澤口杜志さん、小田葉さん、中村ご夫妻、会場の菊池ご夫妻、素敵なお客様方。沿岸の津波の被災地の皆様との交流。これらすべてが心の宝ものとなった。

相手の心に届く声を求め、和・アカデミーでボイストレーニングもしている。

今、手ごたえを感じて面白くなってきたのは読み込みだ。

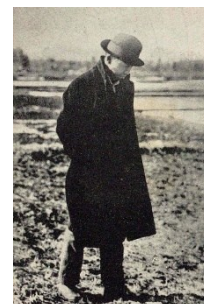
私は、宮沢賢治を地元岩手の訛りで語っている。賢治は都会の人から見ればファンタジーだが、地元から見れば岩手の「そのまんま」を描いている。岩手の訛りで語ると、見える作品世界が変わってくるのだ。

その中で、ずっと「よだかの星」は避けていた。いじめられて鳥が自死する話と捉える向きが多く、私には暗くて謎だらけの作品だった。なぜ鷹はよだかを殺さず帰るのか、なぜ太陽や星は冷たいのか。なぜ何度も空をとび巡るのか。腑に落ちないと語れない。

ある時、賢治は「仏法説話」を書きたくて童話を書いた、と耳にした。よだかは最後、「はっきりまなこをひらきました」つまり開眼！どこにもよだかは死んだとは書いてない。仏法には死んで星になるという思想はない。賢治の信仰は一生成仏を説く法華経。よだかは自分の力で切り開き、なりたいものになったのだーそう気づいた時、自分の中で最も語りた作品の一つになった。その語りを聴いて、友人が涙したのを私は忘れない。

今、6月に東京で語る作品の読み込みをしている。選書は主催の児童文学評論家 赤木かん子氏。19世紀のイギリスが舞台なので、背景から調べているが、多忙でなかなか図書館に行けないので、生成AIを使っている。もちろんハルシネーションは注意しなければいけないが、ざっくりイメージを掴むだけならそこそこよい。当時の10歳の少女の服装は？と聞くとイラストまで描いてくれる。すごい時代だ。

この秋の語りの祭りー三重は初めて行く。どんな土地かしら。そしてどんな心震える語りに出会えるのか。わくわくが止まらない。(ふじさわ・ようこ)



国立国会図書館
「近代日本人の肖像」より